

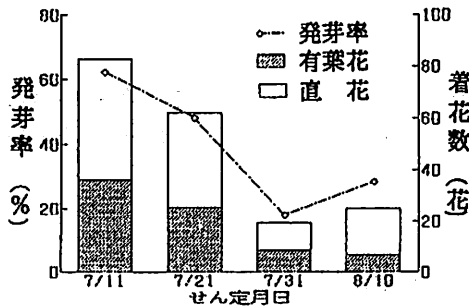
課題名	2 温州ミカンの施設栽培における高品質果実の多収生産技術	分類	①
	(1)温州ミカンの早期加温栽培における夏季せん定時期とビーエー液剤の利用法		
試験研究年次	63~2年(完了)		
<p>I 目的</p> <p>温州ミカンの夏枝結果母枝利用型の12月上旬に加温を開始する栽培で、せん定時期が結果母枝の充実程度に及ぼす影響、並びにビーエー液剤による発芽促進法を検討し、安定生産技術確立に資する。</p>			
<p>II 試験方法</p> <p>1 夏季せん定の時期と加温後の発芽及び着花 63年 7月15、30日、8月15日に、場内露地で栽培した 6年生山川早生を全摘果とせん定を行い、結果枝となる夏枝を発生させて12月 1日から最低温度20℃のガラス室に搬入して加温した。 また、1年は 7月11、21、31日、8月10日に同 7年生山川早生のせん定を行い、12月 5日から最低温度20℃のガラス室に搬入して加温した。</p> <p>2 夏季せん定時のビーエー液剤散布による発芽促進 2年7月17日、場内鉢植えの2年生石塚早生をせん定し、ビーエー液剤(ベンジルアミノプリン)を200倍及び400倍で散布した。散布時期はせん定当日とせん定 6日後の区を設けた。 散布量は170CC/1樹、1区1樹 3反復とした。</p>			
<p>III 主要成果の概要</p> <p>12月上旬に加温開始する温州ミカンの栽培においては、優良な結果母枝を確保するためには 7月中旬までに夏季せん定を実施する。結果母枝となる夏枝の発生が不足するおそれがある場合は、ビーエー液剤を散布すると発芽が早まり、夏枝の発生数も多くなる。</p> <p>1 7月中旬~ 8月中旬に夏季せん定を行う場合、せん定時期が早いほど 1 樹当たりの枝数及び葉数は多くなり、緑化期も早くなって結果母枝が充実する。</p> <p>2 12月上旬に加温を開始する場合、 7月中旬までに夏季せん定を実施すると加温後の発芽が良好で、開花は揃い着果数も多くなるが、 7月下旬以降のせん定では発芽及び着花数が不足する。</p> <p>3 夏季せん定時にビーエー液剤を散布すると夏枝の発生が増加して葉数が多くなる。せん定後6日頃の萌芽直前に濃度400倍で散布するとよい。</p>			

IV 主要成果の具体的データ

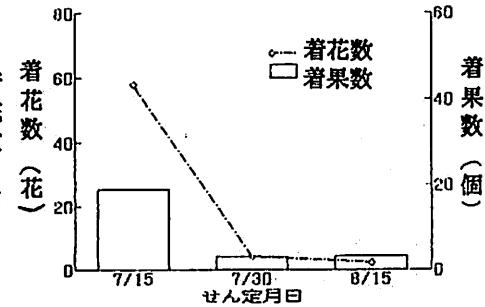
第1表 せん定後の夏枝発生 (1年)

せん定時期	せん定前 葉数	せん定後		発生 葉数	せん定後の夏枝発生			秋梢		
		葉数	除葉率 %		発生期 月/日	緑化期 月旬	発生本数 本	長さ cm	葉数 枚	本数 本
7月11日	1,058	665	37	1,544	7/22	8月下旬	343	6	7	12
7月21日	1,197	553	54	1,332	7/30	9月上旬	236	5	8	11
7月31日	1,271	668	47	1,131	8/10	9月上旬	222	6	7	26
8月10日	1,239	660	47	1,151	8/20	9月下旬	221	5	7	13

注) せん定前後の葉数、夏枝発生本数、秋梢本数は1樹当たり



第1図 せん定時期と加温後の発芽及び着花数(1年)



第2図 せん定時期と加温後の着花及び着果数(63年)

第2表 夏季せん定時のビーエー液剤散布が新梢発生に及ぼす影響 (2年)

ビーエー液剤散布時期	濃度	旧葉数		発生葉数	旧葉1葉当たり新葉数	発生新梢数	発生新梢までの日数	新梢の	
		せん定前 枚	せん定後 枚					葉面積 cm ²	長さ cm
せん定当日	200倍	426	246	248	1.0	65	9	10	6
"	400倍	338	179	79	0.4	16	19	11	10
せん定6日後	200倍	386	212	233	1.1	55	14	10	8
"	400倍	324	180	264	1.5	45	13	13	11
無処理	-	288	158	125	0.8	18	21	14	11

注) 葉数及び新梢数は1樹当たり

V 成果の評価と取扱上の留意点

- 1 温州ミカンの早期加温栽培において、優良な結果母枝確保のための技術として活用でき、栽培暦に記載する。
- 2 切り返しせん定は発芽が不揃いとなりやすいため、間引きせん定を主体とした夏季せん定を実施する。

VI 今後の研究上の問題点

ビーエー液剤を連年散布した場合の樹勢等への影響

VII 資料名

- 1 63~2年度福岡県農業総合試験場果樹関係試験成績書
- 2 元~2年度常緑果樹試験成績概要集(農林水産省編)